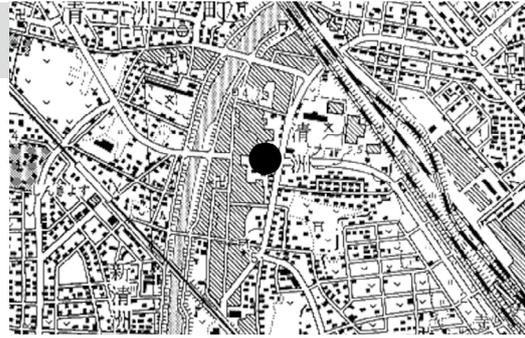


きよすじょうかまち
清洲城下町遺跡

所在地	清須市清洲地内 (北緯35度02分58秒 東経136度06分57秒)
調査理由	街路新設改良工事(住宅基盤整備)3・4・616助七西市場線
調査期間	平成23年9月～平成24年1月
調査面積	1,610 m ²
担当者	鈴木正貴



調査地点 (1/2.5万「清洲」)

調査の経過 調査は愛知県建設部道路整備課による県道助七西市場線建設工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成23年9月から平成24年1月にかけて実施された。調査面積は1610m²であり、昨年度調査区の西側から順にA区・B区・C区の3調査区に分けて調査を行った。

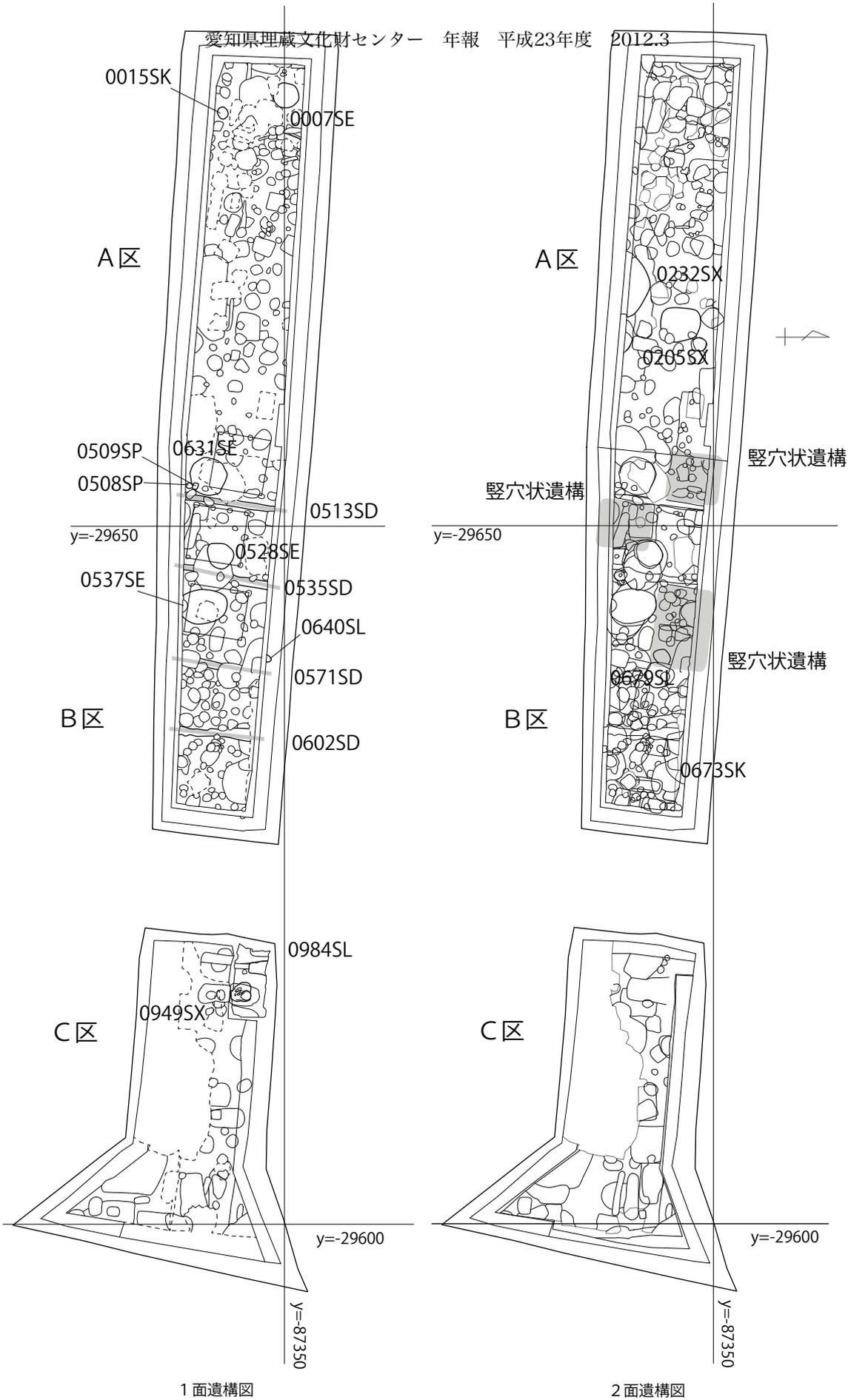
立地と環境 清洲城下町遺跡は五条川によって形成された自然堤防および後背湿地上に立地する。戦国時代から江戸時代初頭までの清須城とその城下町を中心とする遺跡であるが、古墳時代の集落跡から江戸時代の宿場町まで様々な時期の遺跡が複合している。調査地点は、五条川左岸で清須城のほぼ真南の位置にあり、城下町期後期中堀の外側、城下町期前期の武家屋敷域の最南端に相当する。

調査の概要 今回の調査では古代から近世までの多様な遺構や遺物が重複した状態で確認され、地点により3～5面に分けて発掘調査を行った。これらは大きく平安時代、鎌倉時代～室町時代、城下町期、宿場町期の4期に大別されるが、遺構の大半は城下町期前期後半～城下町期後期に属するものであった。この段階で繰り返し遺構の掘削と改変が行われていたと考えられる。

調査区は東西方向に細長く設定されており、基盤層のあり方が地点により異なっていた。A区西半部から昨年度調査区にかけては厚く中粒砂が堆積しており、これが平安時代から室町時代にかけての流路と推定され、そこから東は徐々にシルトなど安定した自然堤防の堆積が確認された。城下町期にはこの流路は埋積し『清須村古城絵図』に描かれた河道に移動したと思われる。以下、時期ごとに遺構の概要を報告する。

平安時代 A区東半部からC区にかけて竪穴建物跡約10棟が確認された。黄褐色粘質シルトなどを地山とする部分に分布し、一辺が3m前後の規模を持つ隅丸方形を呈する。0450SIなどのように支柱穴が検出されるものもあるが、概してカマドや炉などの内部施設は不明なものが多い。須恵器や灰釉陶器あるいは土師器片が出土し、8世紀から10世紀に属するものと思われる。これらは、田中町地区に所在する古墳時代から平安時代までの集落縁辺部に相当する遺構群と想定される。かつて本調査区南東部で出土した墨書灰釉陶器とそれに伴う掘立柱建物跡に関連する遺構・遺物は明瞭には確認されていない。

鎌倉時代～室町時代 C区東部で区画溝2条と井戸1基などが検出されたが、その他の部分では遺物は認められるものの顕著な遺構は今のところ確認できていない。溝(0994SD・0998SD)は幅が1m前後の規模を持つ東西方向に走るもので屋敷などを区画するものと思われる。井戸0999SEは溝と重複する形で検出された方形縦板組横棧支柱式井戸で、最下部で曲物筒が2段重ねられ水溜としていた。時期は13世紀に属する。B区北西部からA区南東端に走るやや規模が大きい溝はわずかに蛇行しながら走り、流路または水路と思われる。



1面遺構図

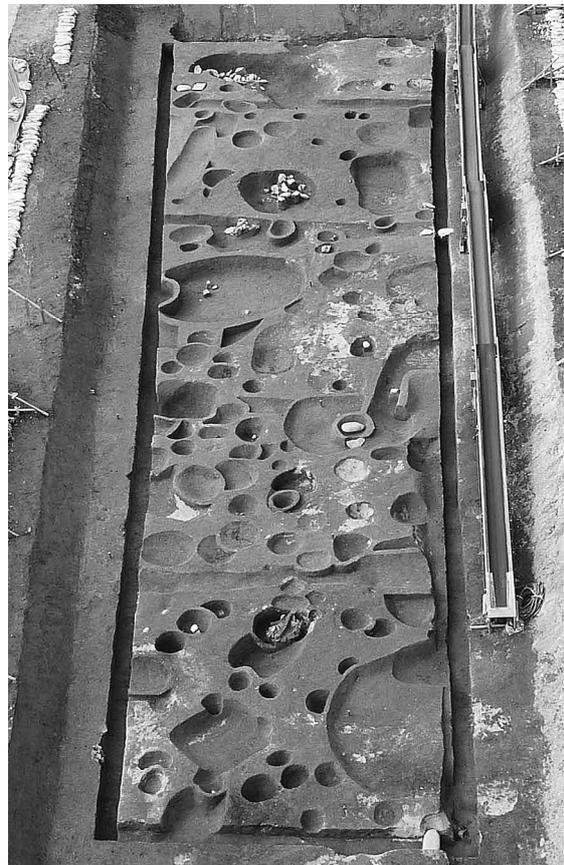
2面遺構図



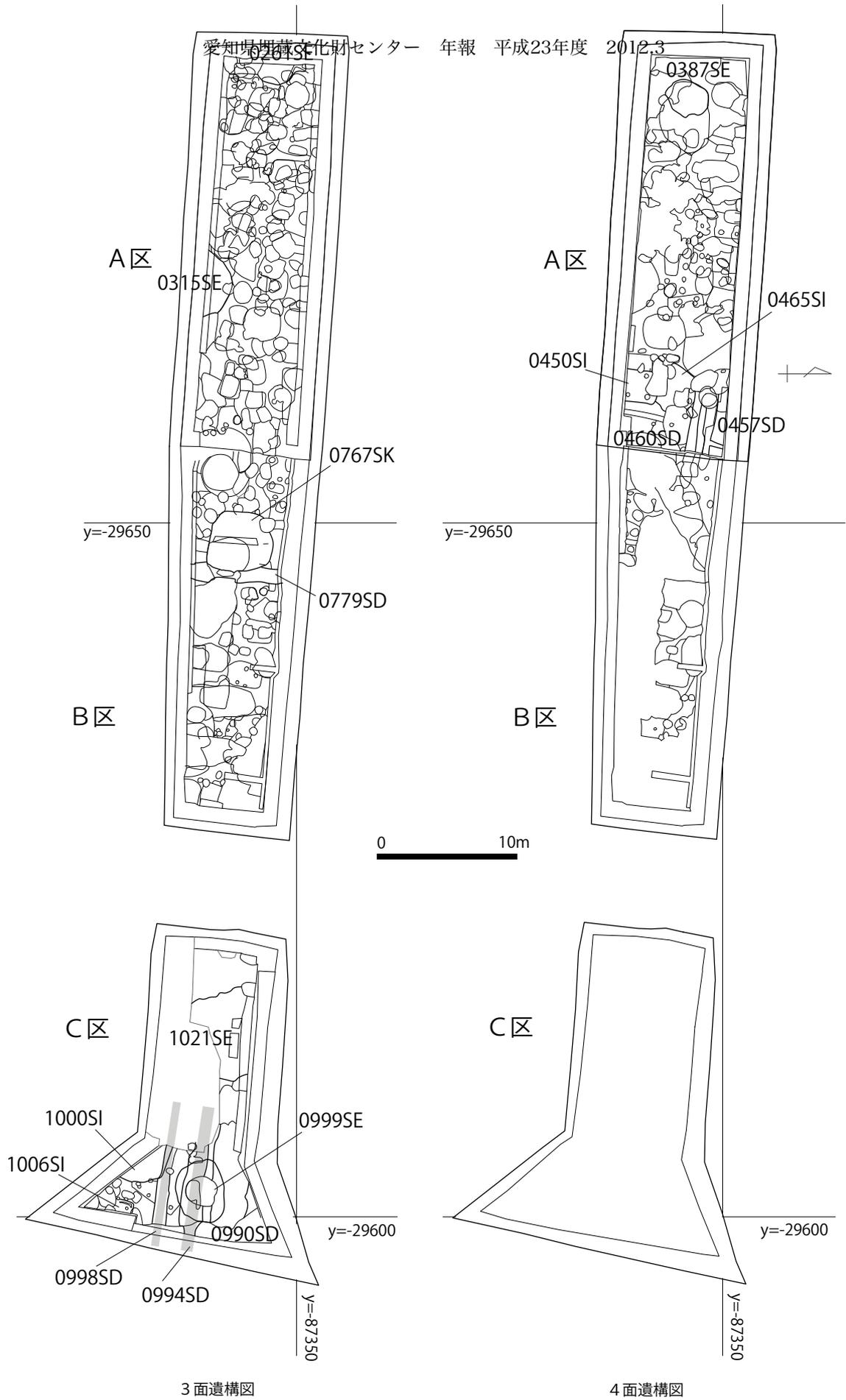
遺跡遠景 南から



A区 2面全景



B区 1面全景



3面遺構図

4面遺構図

城下町1期 (前期前半) A区東半部からC区にかけて溝や堀などが認められたが、その他の遺構は不明な部分が多い。A区北東部の溝0457SD・0460SDやB区中央の溝0779SDは幅がやや狭いが、C区東部の堀0990SDは幅が約3mを測るものであった。堀0990SDは断面V字状であり、方形の武家屋敷を囲む堀の一部と想定される。ただし、城下町期前期後半?の円形結物筒式井戸1021SEに切られ、その先の行方が不明である。これらの遺構は大窯第1段階の瀬戸美濃窯産陶器などの遺物が出土したことから、16世紀前葉を主体とする時期に属する。

城下町2期 (前期後半) 今回の調査では主体となる時期で遺構の重複は激しく、現段階で2期と3期の峻別も含めた時期区分はできていない。溝・井戸・掘立柱建物跡など屋敷を構成する遺構の他に、
 ～城下町3期 (後期) 方形竪穴状遺構・炉跡・長方形土坑・大型土坑・円礫埋設遺構など特異な遺構が多く認められる。

B区1面調査では明瞭な形で町屋と思われる遺構群を確認することができた。溝513SD・535SD・571SD・601SDは5～6m間隔で北北東—南南西方向に平行して走る溝で、その間に掘立柱建物跡と井戸(631SE・528SE・537SE)が検出された。おおよそ南北に細長い屋敷が東西方向に並ぶ短冊型地割が形成されており、町屋であったと想定される。これらの遺構群は出土遺物と天正地震の痕跡との関係などから城下町期3期に属する。A区およびC区ではうまく屋敷割が確認できなかったが、特にA区の井戸(261SE・315SEなど)の配列などからみて、同様の町屋が存在したと推測される。

各屋敷では、井戸や建物跡の他に炉跡・長方形土坑・円礫埋設遺構などが展開する。炉跡またはそれらしき遺構は数基存在するが、0640SLは黄灰色粘質シルトを整地して作られたもので、上部の堆積物から微小鉄片などが出土した。0640SLの下位にも数面の整地面が認められ、そのうち1ヶ所の別の地点で炉跡(0679SL)が検出されており、繰り返し作業面が造成されて炉が構築されたものとみられる。下位の整地面は浅く掘り凹められた竪穴状遺構の床面となっており、0640SLも本来は竪穴状遺構の内部に作られたものだろう。炉跡とはやや離れた場所で円礫埋設遺構が存在する。区画溝に接する位置で2基並ぶケースが多く、0508SPの円礫表面には紫褐色の付着物が確認された。長方形土坑の内部には焼土・炭化物が互層状に多量に堆積していた。周囲で椀型鉄滓や炉材・焼土・炭化物・少量の鋳型片など金属関連遺物が多量に出土しており、鍛錬鍛冶工程を中心とした金属加工を操業していた屋敷と考えられる。また、C区では、床に厚くシルトを貼付け一部が被熱した遺構0949SXがある。このシルト面は合計4回以上造り直されており、鋳造に関連する遺構の可能性が考えられる。

これらの遺構群の下層では、繰り返し炭化物が入る長方形土坑など、多くの遺構群が構築されており、最古段階に位置づけられるものとして大型土坑数基(0767SKなど)が存在する。一辺が5mを超える隅丸長方形プランを呈し、椀型鉄滓や焼土・炭化物が集中して廃棄される部分の他は地山班土で埋め立てられていた。これらの遺構からは大窯第2段階以降の遺物が出土しており、城下町期2期に属すると思われる。

天正地震の痕跡 今回の調査では、旧流路埋積部を中心に地震による液状化現象の痕跡が多数発見されている。下位の遺構は埋土が揺らされたWeb構造が認められ噴砂が貫くものが多く、上位の遺構はWeb構造が観察されず噴砂上に構築されるものが目立つ。時期の判断は慎重を要するが、これらの液状化現象をもたらした地震は天正13年11月に発生した天正地震と推測され、これを基準に時期区分を行うことも可能である。ただし、天正地震を境に大きく遺構配置が変更された形跡は認め難い状況であることから、城下町期2期からひきつづき



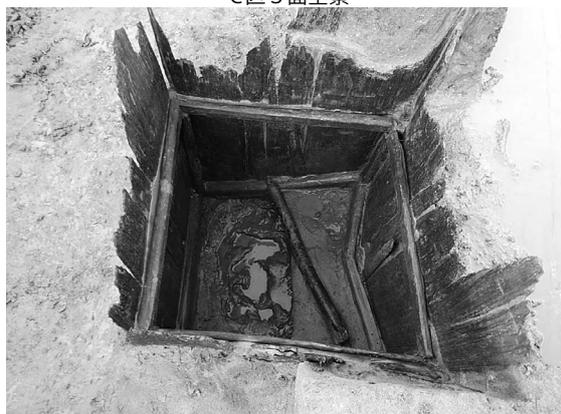
0450SI



C区3面全景



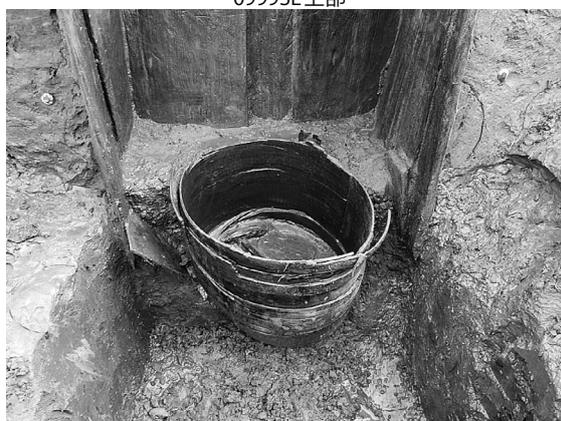
1000SI・1006SI



0999SE上部



中世の水路？



0999SE水溜部



0315SE土層断面



0990SD



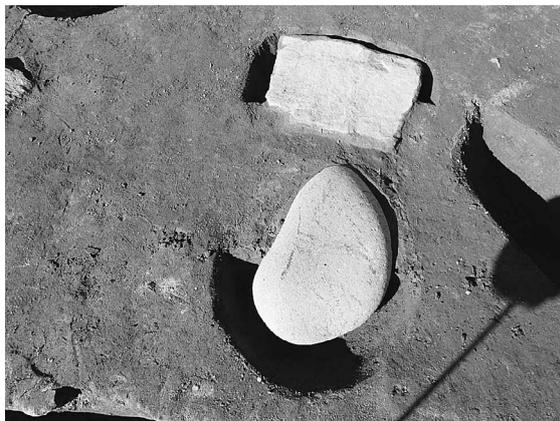
竪穴状遺構



0602SD



0640SL 検出状況



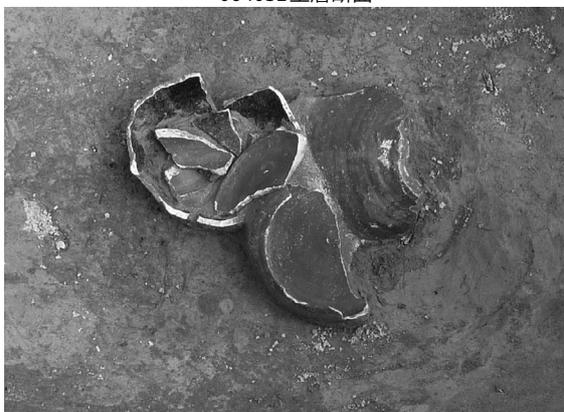
0508SP, 0509SP



0640SL 土層断面



0949SX



0205SX 遺物出土状況



0205SX 土層断面



0767SK



0673SK 土層断面



B区 竪穴状遺構群



0673SK 出土状況



地震痕土層断面



0015SK 出土状況

3期にかけても鍛冶職人らが集中して操業していたと考えられる。

宿場町期 A区西端部で常滑窯産陶器甕を埋設した土坑0015SKや井戸0007SEなどが確認されたが、他の地点ではほとんど遺構は存在しなかった。調査区は美濃街道に面する屋敷の裏手であったといえる。遺物には「秋二焼」碗など18～19世紀の陶磁器類が出土した。

まとめ 今回の調査では、城下町期2期以降の金属製品生産に関わる遺構群が確認され、少なくとも城下町期3期(後期)では短冊型地割の町屋内で鍛錬鍛冶工程などが行われていたことが想定される。前期清須城の武家屋敷外縁部でこのような遺構群が検出されたことは、清須城下町の発展過程を考察する上で重要な成果となるであろう。(鈴木正貴)